

2015.11.14 (土) 第 22 回 日本静脈麻酔学会

「静脈麻酔のニアミスを防ぐ

Prevention of Near Misses in Intravenous Anaesthesia」

ごあいさつ

日本静脈麻酔学会 (JSIVA) を 10 年ぶりに東京で開催する運びになりました。1994 年東京大手町で開かれた第 1 回静脈麻酔・インフュージョンテクノロジー研究会では、一般演題の発表は無く、当時全静脈麻酔を熱心に行っていた海外の麻酔科医による講演がプログラムの中心を占めていました。TIVA や TCI という言葉は一部の変わった麻酔科医だけに通じるギョーカイ用語で、コンピュータで麻酔薬の投与速度を制御するというと、何か胡散臭いことをやっているかのように白い目で見られた時代です。その後、本邦でもプロポフォールの商用 TCI システム発売 (2001)、レミフェンタニル上市 (2007) と続き、初期研修医が TIVA で麻酔を維持することも見慣れた光景になりました。20 余年前、レミフェンタニルという化合物の名前すら耳にせず、短時間作用性オピオイドのアルフェンタニルを使っていた日本の麻酔科医は、今や最先端の薬物を手中にしました。一方、吸入麻酔では海外に遅れること約 20 年、ようやくデスフルランの臨床使用が可能になり、低流量麻酔を安全確実にに行える麻酔器の開発と相まって 21 世紀の麻酔法として注目を集めています。覚醒の速さという点では強力なライバルが出現した現在、もはや TIVA は行きつくところまで到達したのでしょうか？ 誰もが安全に TIVA の恩恵を受けられるために私達が取り組むべき課題は残されているのでしょうか？

覚醒の質が良好で術後悪心嘔吐の頻度が低いという TIVA の利点は広く知られています。TIVA は PONV リスクの高い婦人科腹腔鏡手術等の麻酔に適していますが、静脈確保部位の観察が難しいため、麻酔薬注入トラブルの発見が遅れる危険を伴います。静脈麻酔薬が患者さんの体内に確実に存在することをリアルタイムで把握できない点は、吸入麻酔と比較した TIVA 最大の弱点です。実用化に向け克服すべき障壁はまだ数多くあるものの、呼気中に含まれる極めて微量なプロポフォールを測定する分析技術が、TIVA の安全性を向上させることが期待されます。Dräger Medical の研究者の方にプロポフォール呼気分析に関する最新の知見を解説していただきます。

2012 年 6 月からの 1 年間、麻酔中の予期せぬ覚醒 (Accidental Awareness during General Anaesthesia; AAGA) を検討した英国・アイルランドの第 5 次 National Audit Project (NAP 5) の結果が 2014 年秋に公表されました。この中で TIVA は AAGA リスク因子の一つに挙げられています。重大な麻酔合併症である AAGA を防ぐために、どのような注意が必要なのか、静脈麻酔の陥穽について英国プリマスからお招きする Professor Robert Sneyd に御講演いただきます。

JSIVA の前身である静脈麻酔・インフュージョンテクノロジー研究会の名称が示すように、

TIVA はインフュージョンポンプ、モニターなど各種医療機器と不可分の関係にあります。自動化、省力化など機器が長足の進歩を遂げている今、機械と人はどのように関わるべきなのかを、日本航空の現役国際線機長でいらっしゃる篠崎恵二様にお話しいただく予定です。篠崎機長は元麻酔科医という経歴をお持ちで、医療と航空の両面から興味深い問題提起をしていただけるとおもいます。

この学会にご参集いただく方々はよくご存知のように、静脈麻酔は特にその優れた覚醒の質が魅力的ですが、合併症を持つ患者さんの麻酔が増える今日、吸入麻酔や区域麻酔の適応となるケースがあることも事実です。JSIVA ではおそらく初めての試みとして、「静脈麻酔 vs 吸入麻酔」というディベート形式のシンポジウムも企画しました。両者の優劣に決着をつけるというよりは、それぞれの得失を再確認して質の高い麻酔を提供できるようにすることが狙いです。ディベートには新進気鋭の演者にも登壇いただきます。今後日本の麻酔を牽引する若手の熱いプレゼンテーションにご期待ください。

例年どおり、優秀演題のいくつかには JSIVA 賞を授与したいと考えております。受賞基準を追ってホームページ上に公開いたしますので、特に若い世代の応募をお待ちしています。学会会場は品川駅の隣、「田町」から徒歩数分のグランパークカンファレンスを選びました。近くには赤穂浪士の墓所として有名な泉岳寺や、重要文化財に指定されている慶應義塾旧図書館などもございます。秋の土曜日一日だけの小さな学会ですが各分野の話題を基に熱い討論をお願いできれば幸いです。第 22 回学術集会在「確立したけれども完成していない」麻酔法である TIVA の安全を高める契機となることを祈念しております。秋の東京で多数の皆様にお会いできることを楽しみにしております。

2015 年新春

第 22 回日本静脈麻酔学会 会長
東京慈恵会医科大学麻酔科学講座 教授
木山 秀哉